主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。
私たちは作家一人一人が創作を自由に発表できる場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思います。
私たちは世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒168-0063
東京都杉並区和泉4-36-10
齋藤典久方　TEL / FAX 03(6786)1006

2024.2
No.114

CONTENTS

1p　巻頭言　……吉田　正

2p　第58回主体展審査について
……藤本　卓

3p　第58回主体展陳列について
……長沢　晋一
第58回主体展研究部から
……上野　信彦

4p　巡回展報告（京都）
……森　慎司
巡回展報告（名古屋）
……竹内小夜子

5p　第58回主体展 企画展示
「私の仕事 いま・むかし〈II〉」
……藤田　俊哉

惜別　細矢房子さんとの思い出
……松本　恵美

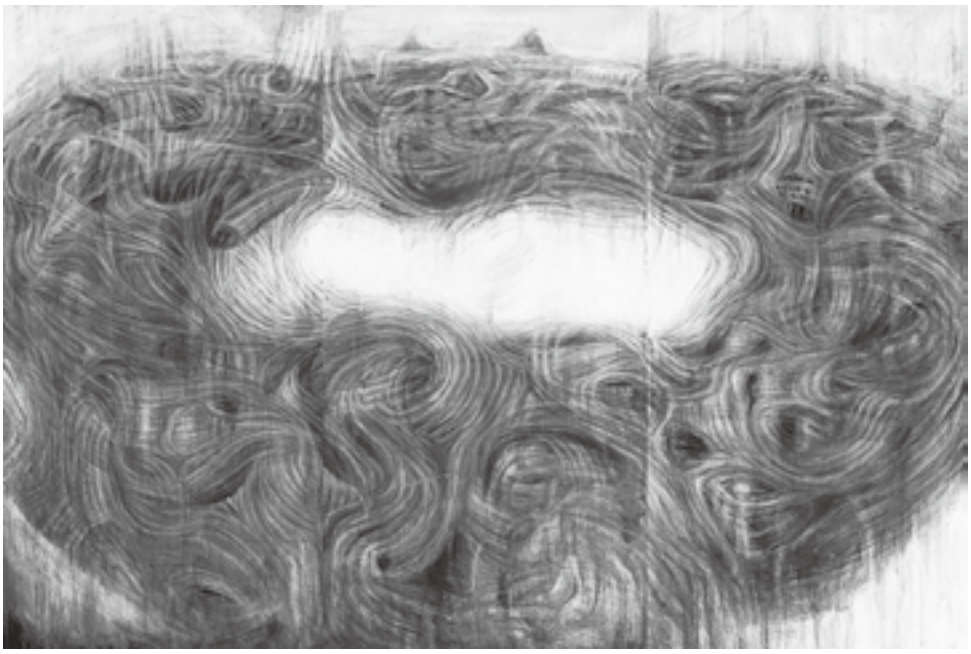
6~9p　2023年新会員紹介
井川　雅子　塚田　勉
池田　正子　日向由美子
内田結美子　宮本　圭子
加藤紀久子　山﨑　清子
金沢　綾子　山田加代子
鈴木　遊　山本　弘子
田中　郁子

ART WAVE

10p　●アトリエ訪問 vol.12
大林 賢三さん（愛知県）

11p　●各地の美術展から
「新たな時代のエトランゼ」
小杉放菴記念日光美術館
「植田寛治さんの絵に再会して」
……山田　礼二

12p　インフォメーション
展覧会記録・編集後記・その他



大林 賢三「蜃気楼−蒼い風景」182×276cm

「作家の担う役割」

吉田　正

『主体美術協会は、自由美術協会から独立した後も日本の美術界において重要な存在として注目を浴びています。独自のアプローチと精神で、新たな表現の可能性を模索し、社会的なメッセージや政治的な意味を伝えています。協会メンバーは、抽象から具象まで多様なスタイルで表現し、一部のアーティストは伝統的な日本文化や美術の要素に独自の解釈や現代的な視点を融合させています。また、社会的な変革や個人のアイデンティティに焦点を当て、芸術を通じて共感を呼び起こす役割を果たしています。協会の展覧会やイベントはしばしば議論を呼び起こし、社会的な対話の一翼を担っています。現在も多様性と創造性に富んだメンバーで構成され、作品は単なる芸術作品に留まらず、社会的な意義やメッセージも含んでいます。これにより、協会は継続的な展開と進化を遂げています。

未来では、デジタルテクノロジーの進化や環境問題など、新たなテーマへの挑戦が予想されます。メンバーたちは異なるメディアやフォーマットを駆使し、社会に対する洞察を提供するために挑戦を続けるでしょう。国際的な視野も重視し、他の芸術団体やアーティストとの協力を通じて異なる文化や視点からインスピレーションを得ることで、協会の表現はより深化し多様化するでしょう。同時に、若手アーティストのサポートや育成にも注力し、次世代の才能を育て、主体美術協会は変革と革新の旗手として、芸術の力で社会に対話と影響をもたらし続けることが期待されます。』

これは、最近話題のChatGPT（生成AIソフト）に、『主体美術協会の今とこれから』について3つのキーワードを入力したところ、たった5秒程度で作り上げた文章である。あまりにも感心したので、長いと思ったが引用してみた。

ネット上に掲載された情報の引用元が不明である点に懸念を抱きながらも、もしこれが主体美術協会としての象徴的な情報であるならば、決して悪い印象はなく、むしろ主体美術の未来につながる鍵となり、理想的な在り方として誇らしく思う。ただ、物足りなさを感じるのは、機関紙等で語られているような主体美術の具体的な取り組みや人間くさいエピソードが、この文章に一切揚げられないことである。

生成AIは生活を豊かにし、仕事の効率化や時間の短縮を図るために開発されたソフトである。私の周りでも構想段階で画像生成AIを取り入れイメージを広げる若手の作家が増えている。かつては現地での取材がもの足らず、視覚的な情報を得るために雑誌や新聞、写真集や漫画などを必死になって漁っていた時もある。今やデジタル化と共有の進化により情報や画像が豊富にネット上に存在し、容易に閲覧可能となっている。更に人工知能の台頭により、我々の視野と創造力が今までにない領域に広がっている。これにより、活用する作家が増えることは当然の帰結である。

一方で、テクノロジーを讃えつつも、これからの時代をアナログでオーガニックに生きたいと体の奥の方で葛藤している自分がいるのも否めない。22年前、田舎で行った二人展にて吉江新二氏に「こんな絵はダメだ。」と強い口調で叱咤された。その日連れて行かれたお酒の席で私は、「忙しい中で絵を描く時間が確保できず質を高めるところまで辿り着けない」と吐露したことがあった。「誰でもそういう時期はある。今を受け入れてできることをやればいい。ただ続けなければだめだ。時間ができたらいっぱい描けばいいじゃないか。」という吉江氏の助言により、自分の気持ちが楽になったのを鮮明に覚えている。

どんな作品にしようかと構想を練り、自分の表現を追求することは時間と辛さを伴うものであるが、同時に心地よくも感じる。テクノロジーの進化により、時間短縮どころか逆に時間に拘束されがちな今だからこそ、美術は重要な役割を担うと感じる。キャンバスに向かって好きなだけ絵の具を重ねたり削ったり、納得のいくまで眺めたり、時間に縛られずに制作に打ち込む、そんな作家としての時間を大切にしたい。

第58回主体展報告

▲今回も感染予防対策をとっての受付作業

▲9月3日に開催されたクロッキー会

▲図録用作品撮影風景

▲審査の様子

▲久しぶりのレセプション（都美術館内レストラン）

第58回主体展審査について

事務局展覧会部　藤本　卓

2023年8月下旬、第58回主体展の搬入･審査は東京･上野の東京都美術館にて実施された。5月から新型コロナ感染症が第5類に引き下げられたこともあり、昨年に比べて出席者数も増え、一つひとつの作品を前にして活発に意見交換をしながら審査が運営された。

主体美術協会において、審査は全会員が等しく有する権利であり義務でもある。どのような作品を受け入れ称揚していくのかはその団体のアイデンティティーに深く関わることであり、この観点から審査の席上では毎年真剣な議論が交わされてきた。会員歴の長短や立場の違いに関わらず自由に発言する機会が保証されていることは、美術団体多しといえど希少価値が高いことだと認識している。そして審査をとおして主体が「主体らしさ」を守り継承していくことは会員一人ひとりが負っている使命である。このことは本年度新会員となられた諸氏には覚えておいていただきたい理念である。ぜひ今後は審査に出席することをとおして主体の理念について学んでいっていただければと思う。

私事で恐縮だが筆者自身は若年より主体の審査に参加することをとおして成長することが出来たという思いがある。自身の嗜好のみで作品の是非を判断するのではなく、評価者の立場にたち、多様な表現に対して心の門戸を開き自問自答する。あるいは他の会員の意見を聞き、ああそういう見方もあったかと気づかされる。時には積極的に推薦の意見を述べ、時には語気を強めて反論する。どうすれば自分の感じたことを他の人に言葉で伝えられるかを必死に考える。その繰り返しの中で絵に対する見方･考え方を深め、表現力を磨くことが出来た。審査をとおして絵について学び、会務･会議をとおして運営とは何かを学んだ。まさに主体は自分にとっての学校であるし、これからもそうであり続けるのだろう。

審査経過について述べる。第一段階では入選か落選か（入落）及び賞候補について一般部門→新人部門の順に全ての応募者に対して等しく審査した。次の段階では賞候補の中から佳作作家を決定し、さらに最終段階では佳作作家の中から秀作作家を決定した。これとは別に新人賞の審査も最終日に行った。入落や賞の決定は最終的には多数決で決まることが多いが、主体の独自性は前段でも述べたようにそこに至るまでに議論を尽くしていることにある。特に佳作を決める段階では最初の審査段階で「賞候補」の声掛けを行った会員が責任をもってその推薦理由を述べ、それを皮切りに議論が始まる。時間はかかるが丁寧に作品を見ながら、絵をとおして応募者と対話する。このスタイルを今年も維持踏襲できたことは価値のあることである。その結果3日間にわたる審査を経て、入選者111名、うち佳作作家20名、秀作作家18名、新人賞3名を選出した。

追記として今年比較的若い世代の初応募者が増えたことを挙げたい。要因としては現在主体が発信のひとつとして研究部を中心に運用している動画配信やSNSの効果が高かったことは容易に想像できる。実際懇親会で会話した応募者に出品理由を尋ねてみると、パソコンやスマートフォンで会場動画を見て興味を抱いたからという返事が複数返ってきた。コロナ禍対策として始まった取り組みが、結果的に新しい世代へのアピールに広くつながっていることを素直に嬉しく感じるとともに、主体に共感して応募してくださったその想いを大切にしていきたいと思う。

最後に審査運営に多大なご協力をいただいた関係諸氏にこの場を借りてお礼申し上げたい。今年度の審査が来年以降のさらなる充実につながることを切に願っている。

（2023年12月）

第58回主体展陳列について

展覧会委員　長沢　晋一

任期2年目となる展覧会委員、返町勝治、續橋守、長沢晋一、中嶋修、福田玲子、藤田俊哉、山本靖久の7名に責任者、会計者を加え58回展の会場デザイン、展示及び企画室展示についての会議を重ねた。

その中で、会員と一般の区別展示、ゆるやかな傾向別展示、会員は昨年と同じ部屋に極力しない、3棟のそれぞれ最初の部屋を大きくとり1室と5室は会員の規格外作品を中心に展示、10室は一般の秀作作品を中心の展示とする。一般最後の部屋を抽象とすることなどを踏襲し基本とする展示方針とした。

具体的な部屋割として

＊4室を企画展示室とし、昨年に引き続き「私の仕事　いま・むかし」第二弾を展示。
＊混合の部屋がいくつかあったことで抽象と具象の部屋の流れが曖昧となっていたが、今回は1室から3室までを抽象、5室以降を具象として大きな流れとする展示方針とした。

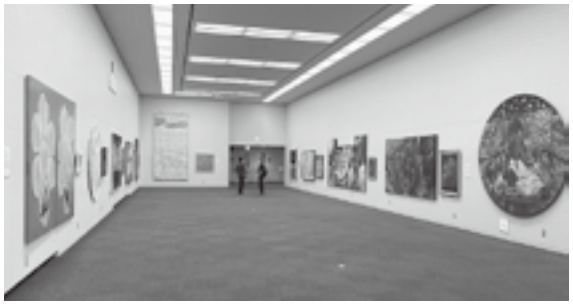
この流れが昨年との大きな違いといえる。しかし、3つの部屋を抽象だけで展示するには作品の数が少ないため、抽象の部屋に入れても違和感が無いと思われる作品を配置することとした。厳密に言えば、混合となるかもしれないが、あくまで抽象の部屋であるという意識で作業を進めた。次回は具象から始まるとすると今回同様大きな流れの部屋割ができるかどうか、企画展示室をどこに配置するかなど課題である。

例年通り搬入初日に会員作品の定点撮影を行い、8月24日に40分の1の会場平面図上で展示計画を練り、全会員作品の配置を詳細に決める作業を行った。小さな写真のため展示当日にかなりの変更はあるが、この作業が短い時間で展示をスムーズに行うためには最善の方法であると現時点では考えている。

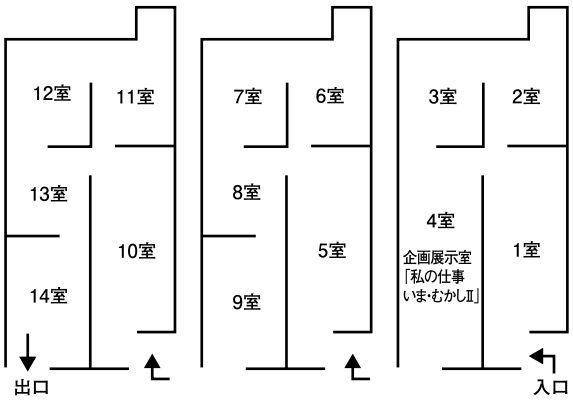
展示室の中で一部暗い壁ができてしまう、それを補うために無料スポットライト30機が用意されているが、今回会期中に追加設置という難しい作業となってしまったことや、組作品の明瞭な表示が浸透してきている中で左右が逆になった事例がおきてしまったこと、規格外出品の事前申請の徹底など、今後のための反省として事前の作業、当日の作業において慎重な確認が必要と感じる。

主体展として展覧会場全体の流れはどうであったか、また個々の作品は夫々が輝ける配置となっていただろうか、円滑な作業のためのシステムは最善と言えるのだろうか、「未来に向けた変化を目指す展示」のテーマは反映されただろうか、考えることは沢山あります。　（2023年12月）

1室



4室　企画展示室「私の仕事 いま・むかしⅡ」



第58回主体展研究部から

研究部　上野　信彦

新型コロナウイルスの感染法上の位置づけが5月から5類に移行し、展示会場に人を入れたイベントが再開できるようになった久しぶりの主体展でした。

研究部としては、まず会期中の有志会員と来場された出品者によるフリートーク形式での会場研究会を再開し、大きな混乱もなく実施することが出来ました。参加者は約50名でした。期間中、出品者から再開を待ち望んだ感想を多く受け取ることが出来ました。会場研究会に協力してくださった会員の皆様、ありがとうございました。

一方で、企画段階では先のコロナの状況が読めなかったため、前年度に引き続き今年度も講演会は開催中止といたしました。

前年度から始めた研究部主催による「主体展ぶらぶら鑑賞」を今年度も実施し、主体美術協会公式チャンネル（YouTube）にて公開しました。いろいろな事情で会期中に会場に来ることが出来ない方にも、会場での展示の様子が分かるよう発信しています。併せて京都、名古屋巡回展の様子も現地会員の写真撮影の協力を得て動画公開しました。

最後に、研究部の活動としては前年度に引き続き、YouTube以外のSNS（Facebook、Instagram、X［旧Twitter］）への投稿を継続しています。内容は主体展覧会の告知、募集の告知、物故作家の展示案内などです。これらの活動により、今まで主体展を知らなかった方々へ私たちの活動をお伝えする機会が増えるようになりました。今後も主体展の魅力を幅広い世代に発信し、会員、出品者、主体展の開催を心待ちにしている皆様と交流を深めていくことが出来るように運用に努めます。様々な企画の遂行にご協力くださった各地の会員の皆様、本当にありがとうございました。　（2023年12月）

YouTube動画【第58回主体展ぶらぶら鑑賞】のご案内

チャンネル登録をお願いします!

主体美術協会チャンネル

左のキーワード検索、または
右のQRコードで検索

X（旧ツイッター）　https://www.twitter.com/shutaiten
フェイスブック　https://www.facebook.com/shutaiten
インスタグラム　https://www.instagram.com/shutaiten

巡回展報告

京都展

事務局　森　　慎司

京都巡回展は2023年9月26日から10月1日の6日間を会期として、京都市京セラ美術館2階北回廊を使用しての開催となりました。先立つ8月の総会で来年以降の京都巡回展の休止が可決されたことを受けて、最後の展覧会として味わいながらの開催となりました。

巡回展示を会員と秀作作家に限ったことでスペースに余裕ができたこと、今回展の展示方針で抽象傾向の作品が1室と2室に集中したことで本展と同様に非常に見やすい展示となったと思います。

近年一貫して会計を緊縮していますが今回展では展示にかかる費用の縮小を図り、例年より外注作業費を切り詰めて半額近くに縮小しました。京都の会員出品者だけでは作業をこなせない分、東京その他の会員諸氏にも陳列や撤収時に協力を仰ぎ、非常にスムーズに作業を終えることができました。想定以上の作業効率で、個人的には久しくなかった自分たちで展覧会を作る気持ちよさを感じられ、展覧会は出品者自身で作るものとはいえ搬入出に関わってくださった会員出品者の皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

会期中はコロナの影響も一段落を迎え、昨年より若干入場者数も増え昨年までの人影が少ないことからくる無力感を感じることはなかったのですが、招待入場者の数は横這い、有料入場者が増えたということで、そのため売上が大きく伸びました。ただこれはいわゆるインバウンドによるもので海外からの観光客が多くを占めるため、展覧会としての充実とは別のものだと言わざるを得ません。収益より見てくれる方の層を考えると展覧会という外に向けた発信のありかた、どういった人たちに向けて発信していくのか、DMやSNSの広報はよく考えねばならないと感じます。次回展がないことで黒字となった残金を繰り越さず本展に返せることとなったのが幸いでした。

最後の展覧会と冒頭に書きましたが、遠くないいつか再開する期待と決意をもって、名古屋展にむけて作品を見送り終了となりました。ありがとうございました。

（2023年12月）

京都展
会場風景

名古屋展

事務局　竹内 小夜子

今年はコロナも5類となり、平常に近くなって、中部からも多くの会員が審査に参加でき、無事に第58回主体巡回名古屋展を迎えることができました。10月17日（火）～22日（日）に愛知県美術館ギャラリーで開催しました。

搬入は10月16日午後1時から東京事務局を含め他地域から5人の方に参加して頂き、アルバイト10人を加え中部のメンバーで作業しました。日美の車から作品を出し会場へ上げるなど力仕事ばかりですが、おかげで時間内に展示作業が無事に終わりました。

陳列は、抽象から具象へという東京展に準じて配置図を作成して頂きました。名古屋会場はA·B·C·Dの4室に移動壁を使い展示します。この配置図作りは東京と名古屋の会場の違いを考えながらの作業で難しいと思います。最初配置図どおりに作品を置き、絵を見て各部屋担当が移動します。展示委員により最終的に157点の位置が決まりました。

会期中には全国の会員の方が見に来てくださりありがとうございました。また、中部地方の知り合いの方に案内状を送っていただき感謝申し上げます。

入場者数は、1225人と去年よりも増加しました。新聞社に共催を依頼した事も効果が出たかと思います。沢山の方に主体展を鑑賞して頂くことは、絵を描くエネルギーになります。

展覧会最後の日に研究部が合評会を開きました。作品のモチーフについて、また、今悩んでいる事、これからの課題など話し合って次の作品作りの糧としました。

後日、中部の反省会では、『去年よりゆったりしていて見やすい』『佳作作家が巡回しなかった。』『D室の展示にもう少しゆとりが欲しかった』『他地域の会員の搬入作業がありがたかった』など意見がありました。

資金面、労力面など難問題が多いことはいつも話題になります。これからも諦めずに全国の会員の皆様の力を借りてやっていきたいと思います。

（2023年12月）

名古屋展
会場風景

第58回主体展　企画展示

『私の仕事 いま・むかし〈II〉』

展覧会委員　藤田 俊哉

昨年に続いて企画展示「私の仕事　いま・むかし」の第二弾を開催しました。今回は24回～34回展の新会員の中から15名の参加を得て、古い時代の作品を最新作と並べて展示。個々の作家の画風の変遷が来場者の話題を呼びました。

また企画室の表示関係の充実をはかり、作家コメントも併せて掲載するなど、作品鑑賞の理解を深めてもらえるよう展示にも配慮しました。企画室の大きさと作品数のバランスもよく、見やすく充実した企画展示室になったと考えています。

一人の作家の創作の長い歳月の歩み、その一端を垣間見せる本企画。何よりも展示した作家本人が画業の来し方行く末に想いを馳せたり、また新鮮な気持ちで現在の作品に対峙できたのではないでしょうか。この企画展示は今年の59回展まで継続する予定です。次回「私の仕事　いま・むかし〈III〉」もぜひお楽しみに…!

第58回主体展　第4室　出品作家（敬称略）

オノ・ミチ・ヒロ	森　慎司	山﨑　弘
柏木喜久子	山本　靖久	工藤　悦子
坂本　勇	渡辺　良一	渡邉　俊行
續橋　守	中嶋　修	吉田　正
藤本　卓	結城　智子	有馬　久二

惜別「細矢房子さんとの思い出」

松本 恵美

細矢さんは、確か私が主体初出品の21回展にはすでに出品していて、私にとっては先輩であり、長い付き合いでした。本木さんに続き、相次いで友人を失うことになるとは。そして続けて追悼文を書く事になるとは思ってもいませんでした。

本木さんの訃報の電話をしたのが彼女との最後の会話になりました。いつも笑顔で、怒った事はほとんど知りません。もっと自分の感情を表にだしてもいいのに。とても周囲に気を使い、芯の強い、そして優しい人でした。

だいぶ前になりますが、大野先生と彼女と3人で、私の運転で吉江新二先生の駒ケ根高原美術館の個展に行って、日帰りのつもりが遅くなり、近くのビジネスホテルに1泊する羽目になったり、彼女とは北海道や秋田、京都、名古屋など一緒に行くことが多かったです。

最後に会ったのは2022年主体の会期中で、2人で「れんこん」という上野の居酒屋の1階カウンター席で日本酒を呑んで、お喋りしました。その時はかなり彼女が酔っていて、JRで帰る細矢さんと、上野御徒町の大江戸線で帰る私は大きな横断歩道で別れましたが、足元がふらついた感じで、心配になり、渡り切って駅の階段を上る迄、後ろ姿を見送っていました。気になって翌朝電話をしたときはすっかり元気な様子で安心しました。その時の後ろ姿が今でも脳裏に焼き付いています。殆ど家では飲まない私ですが、彼女はよく家でも晩酌をしていたようです。

「風景」S50（2022年　第57回主体展）

交通事故にあって、それからあまり体調がよくなく、制作も大変だったと思います。会期中、私の当番の日を聞いてきて、それに合わせて上野まで来てくれていました。2021年は不出品でしたが、作品は小さくなっても、頑張り屋さん。翌年は出品していました。

ずっと一人の人を想い続け、いろいろ話してくれました。きっと幸せだったと思います。今頃は、その人や、本木さんと会っている彼女の嬉しそうな笑顔が浮かんできます。

2023 NEW MEMBER

新会員紹介

第58回主体展にて会員に推挙された方のプロフィールです。今回は13名の新会員が誕生しました。おめでとうございます。

まず、自作について語っていただき、会員になってやりたいこと、抱負を語っていただきました。

皆さん、今後ともよろしくお願いします。

（五十音順・敬称略）

第10室

井川 雅子（いがわ まさこ）

「運命と調和Ⅱ」F100

■生年月日
1947年10月27日

■出身地
大阪府豊中市

■制作に使う主な素材
油彩、アクリル

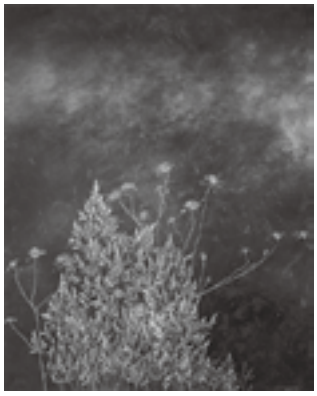
■自作について

［運命と調和］［又違った表情を］などのテーマに沿って、描き続けて来ました。人間の運命とは運命は変えられず受け身で調和して行く考え方の場合と、運命を自分で切り開き、調和を図って行く場合とあり、出会いと別れ悲しみと喜びを調和しながら、前へ進み出す、幾多の多難を乗り越えて、未だ終わらぬ人生を模索しながら歩き続ける。

■会員になってやりたいこと

少しテーマから、はみ出し、どんな形をつくりだせるか？　人は（心）で生きている！ その（心）は純真無垢なものなのか、欲心を持っているか、過分欲に注意し、自分の（心）を磨く（心）で生きるのが人間。美しい音楽を聴いて（心）が和んだり、意見が対立して腹を立てたり、日々起きてくる事象、（心）は淡々と変わる。人は（心）で生きている。自身の（心）によって生き方も、生きる力も大きく変わる人は（心）で生き続ける

池田 正子（いけだ まさこ）



「fu･u」F100

■出身地
北海道

■制作に使う主な素材
油絵具

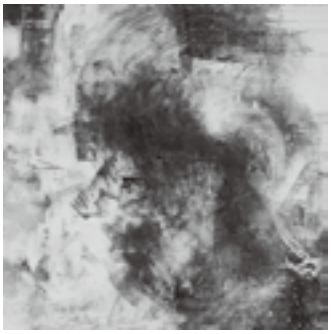
■自作について

朝歩きをはじめました。いつもは車で通りすぎる道、歩いていると空気や空の色が、ゆっくりと変わっていくのを感じる。草木は芽吹き葉をつけそして枯れていく。ずっと見慣れていたことなのに、とても新鮮に思えた。そんな感覚を絵にしたいと思いました。

■会員になってやりたいこと

絵は少しずつ変化してきました。コロナを経験し、今までと違った景色を見た感じがします。これからも、数多くの事柄が待ち受けていると思いますが、右往左往をしながらも、絵を描く事だけは変わらず続けていきたいと思います。

内田 結美子（うちだ ゆみこ）



「目眩」S100

■出身地
神奈川県

■制作に使う主な素材
アクリル、銀箔、コラージュ用に和紙や、古い英字新聞など。墨

■自作について

描くと言うことは己れに向けての自問自答に他ならない。己れの内側から照らして、見たくは無い黒い物を見る。憎しみ怒り絶望…それでも高みから光が射してくるのを私は知っている。

○真っ白な巨大な画布にたじろぎぬ 魔よ忍び来て我にささやけ
○ぬばたまの闇を切り裂く修羅の声今ひとたびの神の鈴音を
○芸術という名の美酒は悠久の時密やかに解脱して行く

■会員になってやりたいこと

今は会員になったことだけでも緊張感で一杯なので、会の中では何かお手伝いできることから参加させて頂きたいと思っています。会員としては兎に角、少しでもいい絵を描きたいです。

加藤 紀久子（かとう きくこ）

「角突き」F100

■出身地
東京都
■制作に使う主な素材
油絵具

■自作について
東京での生活しか知らない自分が牛を描き始めて20年近く向き合って来ました。我乍ら何是？と思いますが、追求することの楽しさがあったからと思います。牛とは馬が合ったのでしょう。これからどの様に変化するのか出来るのか？出来ればラッキーと思います。

■会員になってやりたいこと
主体展には私が学生時代に教師であった故、磯村敏之先生とのご縁で出品させて頂きましたが、先生が逝かれて心にぽっかり穴が空いたまま出品を続け今日に至りました。その間会員の皆様の励ましに押され今年会員として迎えて頂きました。主体美術発展の中で自分も成長できたらと思います。

金沢 綾子（かなざわ あやこ）

「九月の午後」F100

■出身地
東京都
■制作に使う主な素材
油彩、アクリル他

■自作について
美しいと、心地よいと、人が感じる根源に1/fゆらぎが関連しているという話から光や水面というモチーフに興味をもった部分もあるのですが、それ以上にプールで泳ぐことがものすごく好きという理由から近年はプールを描いていました。他にも描きたいものは多いので今後どうしていくのかわかりません。

■会員になってやりたいこと
描く時間をより多く作れるように生活していきたいと思っています。描きたいものをこつこつ描いていきたいです。会のためにお仕事をされてる皆様のお手伝いが何かできれば努力したいと思います。よろしくお願い申し上げます。

鈴木　遊（すずき ゆう）

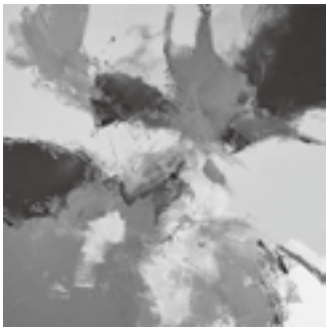
「冬の池」M120

■生年月日　1951年6月18日
■出身地　埼玉県
■制作に使う主な素材　油絵具

■自作について
自然が好きで主に風景を描いています。長年、外でのスケッチと春と秋のスケッチ旅行などをしていました。最近は近所の散歩、ハイキング、畑など身近なところからヒントを得て絵にしています。何気ない風景でも見えない空気を描く、空気感を描く、空気を感じる作品を描く、と思いながら制作しています。

■会員になってやりたいこと
この度、会員となり一段と身の引き締まる思いです。皆様から学ばさせていただきこれからもチャレンジしたいと思います。

田中 郁子（たなか いくこ）



「No.58 -holic-」S100

■生年月日
1965年1月30日
■出身地
北海道浦河町字姉茶
■制作に使う主な素材
油彩･アクリル

■自作について
人物を描いていたころから、常に自分自身を描いてきました。今もそれは変わらず、自分の内なる声を聴きながら、画面に何かが現れるまでひたすら筆を走らせています。モチーフといったものを聞かれるのが一番難しいのですが、生まれ育った北海道の空気感が色と形になって私と一体化しているように感じています。

■会員になってやりたいこと
まだまだ、経験値が少ないので、まず会員の皆様の名前を覚えることと、さらに精進し、いろんな可能性を追求していきたいと思います。そして、ぜひ北海道で主体展の展示ができたら嬉しいなと思います。

塚田　勉（つかだ つとむ）

「修験の古道(常滑)」F120

■生年月日
1939年11月26日
■出身地
愛知県
■制作に使う主な素材
油絵具

■自作について
風景画を描いています。空気や水など、いつまでも美しくあってほしいと願っています。自然をテーマに自己流の作画で苦しんでいます。
会の新しい流れも気になっていますが、固まらない自由な制作を心掛けています。

■会員になってやりたいこと
多くの先輩たちにご指導を受け、今日に至りました。主体美術が時代に遅れることなく、新しい美術の作画を追求したいと思っています。今後もご指導いただきますようよろしくお願いします。

日向 由美子（ひゅうが ゆみこ）

「刻 2023」F120

■生年月日
1961年7月11日
■出身地
埼玉県
■制作に使う主な素材
油絵具

■自作について
数年前、散歩中に、廃材の山に出会った。ふと、東日本大震災のことが思い起こされた。私は、平穏に暮らしているけれど、被災された人々は、どんな思いで、乗り越えてきたか。廃材の山を描くことによって、寄り添えないかという考えが浮かび、そんな単純なことではないとわかりつつも、描きたいと思ったので、描いた。
そして、2024年1月1日能登。この日も心に刻むことになる。

■会員になってやりたいこと
描きたい気持ちは、とても大きいのに、何を描くのかは、いつも悩んでしまいます。私が描くものはこれだ、というものを求めて、ずっと探し続けていました。会員になって、意識も変わると、今までとは違った見え方ができるような気がしています。新たなステージで、学びながら、私の描きたいものを見つけ、表現していけたらと思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

宮本 圭子（みやもと けいこ）

「Q to the Universe」153×170cm

■生年月日
4月9日
■出身地
東京都
■制作に使う主な素材
ミクストメディア（ネット、チュール、ワイヤーなど）

■自作について
油彩を描いていた私が7～8年前に始めた半立体の制作、気性にあっているのか、楽しくて仕方がありません。湧き出るかたちを、どんな素材が、どんな方法が実現してくれるのか、それを考えるところからワクワクします。実際にやってみたらダメだった、と落胆することも多いのですが、再挑戦も大きな楽しみのひとつです。

■会員になってやりたいこと
自己満足に過ぎないかもしれない私の半立体作品を公募展に出品してみようと思ったとき、ずっと見続けてきた主体展しか頭にありませんでした。このたびの会員推挙を、このまま進んでOK、と力強く背中を押してもらったように感じています。私が主体の会員に足る、と判断された点は何なのか、それを見極め、もっと育てていきたい。そして、観る人に自分の心が伝わる作品を制作していきたい。そのためには、つまらない自分でいてはいけない、と考えています。

山﨑 清子（やまさき すがこ）

「つかのま」F100

■生年月日
1965年9月27日
■出身地
長崎県
■制作に使う主な素材
油絵具、透明水彩絵具

■自作について
山と海のあるところで子供時代を過ごしました。よく家族で山に登り、風にそよぐ葉の音や、樹々の間から溢れる陽光を感じながら森の中を歩きました。それらが私の絵の原風景になっているように思います。主体展の制作は油絵ですが、今は様々な画材を試しながら描いています。新たな気持ちで、自分が描きたいモチーフに合わせて、自由に画材を選んで表現していきたいです。

■会員になってやりたいこと
これから主体美術協会の会員として、会のお仕事に携われることがとても嬉しいです。皆様に学びながら、少しでもお役に立てるよう努力します。どうぞよろしくお願い致します。

山田 加代子（やまだ　かよこ）

「深緑の森I」F100

■出身地
群馬県

■制作に使う主な素材
アクリル･油絵具

■自作について
主体展に出品した時から森の絵を描いています。樹木の様子は季節と共に移り変わりますが、冬に葉が落ちて寒々とした樹々が、春に芽吹き、柔らかい新緑に包まれる時が一番好きです。森の静けさ、そこに息づく植物の生命力を表現したいです。絵にすることは難しく、試行錯誤を重ねています。

■会員になってやりたいこと
長く出品を続けてきて、会員になることを目標としてきました。この度、会員に選んで頂き、嬉しい気持ちで一杯です。これから自分に何が出来るか、絵と向き合い、新たな挑戦をしていきたいと思います。そして、会員として会に協力出来ればと思っていますので、よろしくお願いします。

山本 弘子（やまもと ひろこ）

「月光　2023」162×224cm

■生年月日
1962年10月31日

■出身地
愛知県

■制作に使う主な素材
油彩

■自作について
題名に「月光」とつけるのはこれが2回目です。15年前、初めて主体展に応募した作品と同じテーマで会員になれたことは、とても感慨深いものがあります。この15年間、空や海、森、風や光をモチーフに絵をつくってきました。自然への畏敬の背景には、いつも人への思いや精神的な提示を込めてきたつもりです。 最初に描いた「月光」は追い求めている遠い月、15年後の作品は優しく月に照らされる地球。描きながら自分の心の変化にも気づきます。また、見てくださる人は全く違った観点で感想をくださり、それも興味深く聞いています。本当に、描き続けてよかったなと思える一枚です。

■会員になってやりたいこと
会員の方々には、たくさんの励ましや、作品へのアドバイスをいただいてきました。個性豊かな皆様の、作品への情熱、面白いものを見つけ出すアンテナを見習いつつ、自分の表現を見つけていきたいです。

第58回主体展 受賞者

新会員　13名

井川　雅子（大阪府）
池田　正子（北海道）
内田結美子（神奈川県）
加藤紀久子（東京都）
金沢　綾子（神奈川県）
鈴木　遊（神奈川県）
田中　郁子（北海道）
塚田　勉（愛知県）
日向由美子（埼玉県）
宮本　圭子（東京都）
山﨑　清子（神奈川県）
山田加代子（群馬県）
山本　弘子（愛知県）

秀作作家　18名

井川　雅子（大阪府）
池田　正子（北海道）
内田結美子（神奈川県）
遠藤　照美（神奈川県）
太田　琴乃（千葉県）
加藤紀久子（東京都）
金沢　綾子（神奈川県）
Jimmy-Atget-Ohashi（東京都）
鈴木　遊（神奈川県）
田中　郁子（北海道）
檀原　惠子（東京都）
塚田　勉（愛知県）
日向由美子（埼玉県）
宮内　和（奈良県）
宮本　圭子（東京都）
山﨑　清子（神奈川県）
山田加代子（群馬県）
山本　弘子（愛知県）

佳作作家　20名

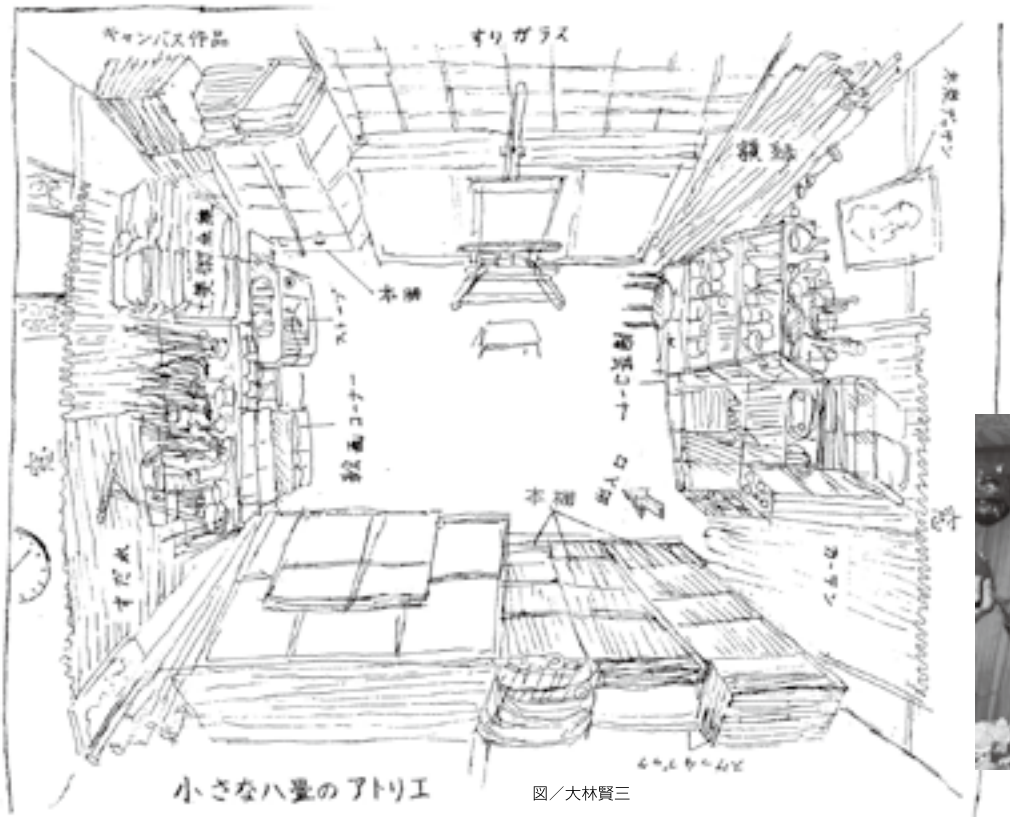
相澤　美枝（東京都）
荒井　美緒（秋田県）
李　龍海（福井県）
泉　すみれ（愛知県）／新人賞
小松　くみ（埼玉県）／新人賞
佐竹　照代（愛知県）
末田八重子（愛知県）
立川　広己（埼玉県）
田中未知世（神奈川県）
塚本　照子（愛知県）
津田テリー直美（東京都）
土川　祐子（千葉県）
箱﨑　和美（京都府）
比嘉　理湖（沖縄県）／新人賞
東堤　友美（東京都）
広兼　明子（大阪府）
藤阪　元浩（東京都）
古橋しげ美（静岡県）
村野　雄亮（東京都）
山口　泰史（愛知県）

アトリエ訪問 vol.12

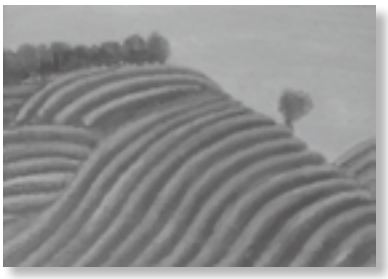
愛知県豊川市長沢町

『大林 賢三さん』ー豊川市のアトリエを訪ねて

取 材／竹内小夜子、森伊津子
文／竹内小夜子



図／大林賢三



▲若い頃の作品

▲応接室の壁一面に飾られたお面

8畳のアトリエ

11月29日に森伊津子さんと一緒に、大林賢三さんのアトリエ訪問に行ってまいりました。めいでん長沢駅で降りると、間近に山が迫り、広がる畑が目に飛び込んできました。夜には、鹿や猪が作物を食べに出て来るそうです。敷地の入口では、小さな素焼きのお地蔵さん（大林さん作）がたくさんお出迎えしてくれました。広い屋敷を進んで玄関に到着すると、応接室に案内され、最初に目に入ってきたのは、壁に隙間なく飾られたお面の数々でした。これらは、日本各地から外国のものまで、若い頃から収集されているそうです。他にも、懐かしい暖かさを感じる若い頃の小品が掛かっています。

離れのアトリエ（8畳）に足を踏み入れると、そこは大林さんの作品に取り囲まれた世界でした。イーゼルには、まるで今描き上げたばかりのような作品がありました。周りの棚には、材料や美術関連の本、キャンバスの作品群があり、焼き物の作品やうわぐすりなども置かれています。

大林さんは、自家製のキャンバスを使用しているそうで、ベニヤ板に布を張り、ジェッソに砂を混ぜて下地作りをしていると教えていただきました。使用されている画材は主にアクリルで、独特のザラザラ感のある青い地肌の作り方を知ることができました。また、部屋が狭くて大きな絵をそのまま描くことが難しいため、アトリエでは画面を分割して描かれているそうです。大林さんはもっと広いアトリエが欲しいとおっしゃっていました。

主体展とのかかわり

主体に出すようになったきっかけについて伺いました。武蔵野美術大学デザイン科を卒業された大林さんが、なぜ主体に出品するようになったのかというと、地元の主体作家である畑遼氏の勧めで出品するようになり、題材も畑氏のアドバイスで夜店を描くようになったそうです。その後、テーマについて悩みを抱え、現在の作品が生まれたそうです。青色を主に使う渦巻き状の作品は、精神世界と永遠の命のつながりを表しているそうです。命のつながりや、人類誕生よりもっと前からのつながりを表現したいとおっしゃっていました。そのようなお話を伺うと、絵の深みが一層感じられました。現在は、昔のデザイン科出身の感覚が蘇り、新聞などの切り抜きから形の面白さを見つけ出し、それを絵のアイデアにしているとのことでした。主体の良いところについて伺うと、民主的に作品を発表できること、そして序列がないことが大きな魅力だとおっしゃっていました。

◀自作を前にアトリエでの大林さん

理想は晴耕雨読の生活

その後、日本間に通されてお抹茶を、作法を教えてもらいながら美味しくいただきました。お茶も若い頃から学ばれているそうです。大林さんは、陶芸やお茶（師範有）を嗜まれ、絵を描きながら晴耕雨読の生活を理想とされているとのことでした。

帰る時には、大林さん作の素敵な抹茶茶碗をお土産にいただきました。私はピンク色がかった茶碗を、森さんは漆黒の茶碗を選びました。『楽しかったね』、『別人の大林さんを知ったね』と言いながら、帰りの電車に乗りました。

各地の美術館から

小杉放菴記念日光美術館　2023年9/16（土）～11/19（日）

『新たな時代のエトランゼ
ーパリへ渡った日本人画家たち1950～70sー』

「植田寛治さんの絵に再会して」

山田　礼二

▲美術館正面玄関

栃木県日光市にある小杉放菴記念日光美術館にて、昨年9月16日から11月19日まで開催された「新たな時代のエトランゼ ーパリへ渡った日本人画家たち1950～70sー」を観てきた。この美術館は、日光の出身で日本美術院再興や春陽会結成に関わり、横山大観や芥川龍之介らとも交流のあった画家の小杉放菴（本名　国太郎）の画業を残し、多くの人々に芸術を鑑賞する機会を提供するとともに、さまざまな催しを通じて芸術文化の振興発展に寄与することを目的として作られた。

明治時代以降、山本芳翠を皮切りに、五姓田義松、黒田清輝、続いて岡田三郎助、藤島武二らが留学し、帰国後の日本画壇に多大な影響を与えた。本展は第二次世界大戦を経た1950年代から70年代、パリに渡った次世代を担う若き洋画家たち、野見山暁治、赤堀　尚、笠井誠一、植田寛治（主体美術協会）、進藤　蕃、入江　観、小杉小二郎（以上敬称略）の7人の作品展である。

フランスの首都パリは、本場の美術を学びたいと願う日本の若い洋画家の憧れの地であり、新たな挑戦の場であった。絵画の分野では、アンフォルメル（抽象表現主義）全盛の時代の中で、ひたすら具象にこだわり、パリにおいて何を学び、習得してきたのか。本展においてパリ滞在中の作品と帰国してからの作品を比べることも、各作家についての理解を深めるための良い資料となっている。ちなみにエトランゼとは「異邦人」のこと。戦前の留学生と違い、戦後の新しい時代の日本人がパリをどのようにとらえ、また、現地でどのように見られていたかも興味深い。

展示されている作家を細かく検証するのは読者諸氏に任せるとして、ここでは帰国後の1966年に主体美術協会会員となった我々の先輩である植田寛治さんについて触れていきたい。

植田さんは、入江観さん、笠井誠一さんと共に東京藝術大学を卒業後、1959年に渡仏し、パリ国立美術学校に入学、ジャン･スーヴェルビー氏の厳しい指導を受ける。当時の彼の日記には、その指導の言葉が残されており、制作に悩む姿が読み取れるという。外国人嫌いだっという師の教えは、はたしてすんなり受け入れられたのだろうか。主体美術機関紙107号で榎本氏が書いた追悼文に、「先生（スーヴェルビー）からは教室から出ていけ、と侮辱され駆倒される毎日。しかし最後には教室中でオレの話についてこられるのは君だけだ、とまで言わせしめた。異国で孤独に耐え、歯を食いしばりさぞ苦しい日々だったことだろう。」という一節がある。彼が主体展審査の際に見せる激しい主張は、この時に培った反骨精神の表れであろう。

植田さんは1959-63年（25-29歳）の最初の留学以来、5回も渡仏している。25年もの間、フランスと日本を頻繁に行き来しており、70年代はほとんど日本にいない。それほどまでに彼を惹きつけたものは何なのだろうか。

▲パリの街並みを写した写真。写真を参考に作品を描くこともあったようで、「自分サイドに自分というものがしっかり持たれているということが必須条件である。」と語っている。

▲北側を全面窓にした24畳のアトリエ。現在は多帆さんにより、「アトリエ神楽（こうらく）」として一般公開している。

◀チラシ表面
上段左
　赤堀　尚「ジッダの海」
上段右
　植田寛治「歩道の初秋」
下段左
　笠井誠一「ヴァイオリンと壺」
下段右
　入江　観「南仏の農家」

チラシ裏面▶
左上段
　野見山暁治「岩上の人」
左下段
　進藤　蕃「花と裸婦（Nu）」
右下段
　小杉小二郎「ビンとサクランボ」

植田さんが亡くなられてから、ご子息の多帆さんが520点以上もの作品を載せたオンラインギャラリー「植田寛治 Web画廊」を開設した。1959年、パリ国立美術学校時代のパリの街並みや、アパートからの眺め、セザンヌ風の静物、魅力ある女性のヌード、同級生の肖像、帰国後の京浜地区の街並みなど、個人の絵画作品サイトとしてはかなりの掲載点数である。もともと多帆さんの息子さん（植田さんの孫）によるプログラミングの課題として始めたものだったが、完成を見ずに旅立たれてしまった。遺品整理を兼ねて作品のナンバリング、清掃、撮影を行い、2021年に開設するまで、親子三代の一大プロジェクトになったそうだ。ぜひ下記のキーワードで検索し、ご覧いただきたい。

多帆さんによれば、今のアトリエで一緒に暮らしたのは植田さんが帰国してから10年後の1994年～96年の2年間だけだという。自らの美の追求のために、家族と生活することに距離を置いた彼の心情を綴ったメモが残っている。『生活の場に居るとは嘘とデタラメの交叉する場所に身を置くということ』。しかし、その言葉とうらはらに、帰国してからは近隣の街並みを盛んに描いている。生活の場である「家」を執拗に描くのはどういう心情か。その真意は、Web画廊の「僕のマニフェスト」の項の、「絵は画面自体真物の世界になるのを目指す」という本人の言葉から読み取れる。ありのままの風景をそのまま描きつけることで、画面自体が風景そのものになるとし、自然の前で自分を客観視することに専念した。人々の生活感すら風景の一部と捉えていたのだと思う。

前に一度、機関紙の原稿を依頼したことがある。判読し難い筆致で、時間をかけて読み解き、なんとかゲラを見せたところ、意外とすんなり上機嫌で返された記憶がある。研究会などでも、真剣に絵に取り組んでいる人には優しく説明したり、人当たりが良かったりする。ただし、「調子っぱずれのデタラメは容認しがたい」ということらしい。

植田寛治　Web画廊

展覧会記録

2023年8月末～2024年1月末

■第38回日本の海洋画展（佐藤善勇・手塚國彦 他）
8月14日～8月20日
東京芸術劇場（豊島区）

■北海道のアーティスト50人展
（工藤悦子・永井美智子・前川アキ 他）
8月22日～9月3日
Retara SPACE（札幌市）

■脈・FUKUSHIMA2023展（山田礼二・横井薫 他）
8月23日～8月27日
とうほう・みんなの文化センター（福島市）

■美術収蔵品展　郷土ゆかりの独立展・主体展の洋画家たち（石井晴子・水村喜一郎 他）
8月26日～10月29日
茂原市立美術館・郷土資料館（千葉県茂原市）

■豊福光行個展
8月29日～9月3日
銀座アートホール（銀座8）

■金オーロ遊び展（斉藤望・種倉紀昭 他）
9月2日～9月20日
アートスペース泉（福島県いわき市）

■exhibition twice up! Ⅶ part 1
（北村奈美・久我英輔・新島知夏・前川アキ）
9月4日～9月10日
あかね画廊（銀座4）

■第29回ポン・デ・ザール展（本郷梨衣 他）
9月5日～9月10日
愛知県美術館ギャラリー（名古屋市）

■第45回記念北海道ロビー絵画展
（齋藤典久・佐藤善勇・續橋守 他）
9月8日～9月17日
ギャラリー絵夢（新宿3）

■exhibition twice up! Ⅶ part 2
（上野信彦・大西佐頼・福田和幸・前山陽子）
9月11日～9月17日
あかね画廊（銀座4）

■渡辺良一展
9月13日～9月19日
北見NHKギャラリー（北海道北見市）

■新たな時代のエトランゼ
ーパリへ渡った日本人画家たち1950-70sー（植田寛治 他）
9月16日～11月19日
小杉放菴記念日光美術館（日光市）

■第23回遠州横須賀街道ちっちゃな文化展
（藤田俊哉 他）
10月20日～11月22日
静岡県掛川市横須賀地区（静岡県掛川市）

■大澤政和展
10月21日～11月5日
信州高遠美術館（長野県伊那市）

■第5回石ころ展（関谷昌夫・大口満 他）
10月27日～10月30日
大島画廊2階ギャラリー（上越市）

■第30回記念習志野市美術展覧会　市展受賞者選抜展（保坂淳・嶋村有美子 他）
10月30日～11月2日
習志野市役所庁舎1階（千葉県習志野市）

■草莽の風展（松本恵美 他）
10月30日～11月4日
銀座K' sGallery（銀座1）

■Women' s Works女の仕事展12th
（柴田かよ子・水谷幸子・水野博子 他）
10月31日～11月5日
愛知県美術館ギャラリーG室（名古屋市）

■第36回多摩北部5市美術家展
（小松博映・桑原雄一・森田六男 他）
11月7日～11月12日
成美教育文化会館1階ギャラリー（東久留米市）

■象の内・外2023（長沢晋一 他）
11月10日～11月19日
ギャラリー絵夢（新宿3）

■一空と風と大地一齋藤典久作品展
11月16日～25日
AKIRA一ISAO（横浜市）

■駒屋・三ツ田屋Art Project 2023
（宮林さわ子 他）
11月18～11月26日
商家「駒屋」全館、商家「三ツ田屋」全館
（愛知県豊橋市）

■渡邉俊行個展［祈りのかたち］
11月19日～11月25日
仲通りギャラリー（横浜市）

■5人展4th ー交差する刻ー（柴田かよ子 他）
11月21日～11月26日
ギャラリー名芳堂(名古屋市)

■グループ環3人展（保坂淳 他）
11月21日～11月26日
全日警ホール（市川市）

■玄木会 ー中城芳裕と共にー
（中城芳裕・井上樹里・大西佐頼・落合梨乃・金沢綾子・北村奈美・斉藤望・嶋村有美子・須賀友里恵・竹越夏子・津田テリー直美・續橋守・肥田野紅実・藤本卓・山本靖久 他）
12月4日～12月10日
あかね画廊（銀座4）

■山﨑 弘展
12月5日～12月10日
兜屋画廊（銀座6）

■本間由佳個展「虹雲-点を積む糸」
12月5日～12月17日
ギャラリーCHALRLOTTE.USAGI（横浜市）

■第62回神奈川女流美術家協会展（森脇ヒデ 他）
12月6日～12月11日
横浜市民ギャラリー（横浜市）

■ヴェロン會2023（井上樹里 他）
12月11日～12月23日
高輪画廊（銀座8）

■Ange de Noël（山本靖久 他）
12月15日～12月26日
ギャラリー絵夢（新宿3）

2024年

■第14回新春ポン・デ・ザール展（本郷梨衣 他）
1月4日～1月8日
ノリタケの森ギャラリー（名古屋市）

■新春ガラス絵展（浅野修・井上樹里・山本靖久 他）
1月8日～1月13日
東京・銀座ぎゃらりいサムホール（銀座7）

■初春展（長沢晋一 他）
1月8日～1月13日
ギャラリーGK（銀座6）

■第3回ひぐらし展
（有馬久二・返町勝治・畠理弘・水村喜一郎 他）
1月9日～1月14日
銀座アートホール（銀座8）

■第2回箔絵展（斉藤望・山本靖久 他）
1月15日～1月21日
あかね画廊（銀座4）

■オノ・ミチ・ヒロ展
1月17日～1月21日
三重画廊（三重県津市）

■第13回現代茨城作家美術展 現美展（福田玲子 他）
1月20日～2月12日
茨城県近代美術館（水戸市）

■水村喜一郎 油絵展
1月22日～1月30日
ギャラリー枝香庵（銀座3）

■浅野修展
1月22日～2月3日
銀座K'sGallery（銀座1）

■長沢晋一展
1月29日～2月3日
あらかわ画廊（銀座1）

■第8回 M-art'79展（山﨑弘 他）
1月29日～2月3日
画廊宮坂（銀座7）

※ホームページに展覧会情報の掲載を希望される方は、DMを**事務局 研究部 小林** までお送りください。その情報は機関紙にも反映されます。(会員・出品者を問わず掲載いたします)

令和6年能登半島地震で被災された皆様へ

令和6年能登半島地震により亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げるとともに、被災された全ての方々にお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

機関紙『主体美術114号』制作スタッフ

■事務局作業者
齋藤　典久（責任者）
山田　礼二（機関紙部）
大西　佐頼（機関紙部）
黒川　　洋（会計）

■執筆者
吉田　　正
藤本　　卓
長沢　晋一
上野　信彦
森　　慎司
竹内小夜子
藤田　俊哉
松本　恵美
山田　礼二

■校正
齋藤　典久
黒川　　洋
藤本　　卓
大西　佐頼
返町　勝治
藤田　俊哉
前川 アキ
他 執筆者

■カット
大林　賢三
（巻頭・アトリエ訪問）

2024年度事務局体制

■責任者／齋藤典久　■会計／黒川　洋
■展覧会／山﨑　弘・藤本　卓
■研　究／小林宏至（DM受付担当）・井上樹里（ホームページ）・落合梨乃
■広　報／【図録・出版】北村奈美・大西佐頼【機関紙】山田礼二・桑原雄一
【発送】坪井健一　【広告】長谷川好美
◆巡回展／名古屋：竹内小夜子

2024年 第59回主体展　日程

本　　展／東京都美術館（上野公園）
2024年9月1日（日）～9月16日（月）15日間（2日は休館）
公募搬入／2024年8月22日（木）・23日（金）
東京都美術館地下3階
名古屋展／愛知県美術館8F
2024年10月8日（火）～10月14日（月）

編集後記

■60代の知人が病気で手術すると言うので心配していたら、手術前日にLINEが来た。「9時入院の予定が寝坊して13時に行ったらこっぴどく叱られた」「美人医師と連絡先交換できた」というメッセージとともに、病院の食事と飲み終えた缶ビールの写真が送られてきた。ああ、この人は何の心配もいらない、と思った。
（大西佐頼）

■年明け早々に、スーパーでお正月の食材を買っていたらいきなり携帯がなり出し、能登半島で大地震発生との知らせ。私も含めて地震に慣れている福島県民は、非情にも「なんだ遠いな…」ぐらいで普通に買い物を続ける。後で津波も含めた想像以上の地震だったことがわかると、あの3.11の時の避難状況が蘇ってきた。さらに2日に起こった羽田での飛行機事故、東北新幹線での架線事故と続き、災難ばかりの年明けになった。災害はいつ起こるかわからない。その時だけの防災意識では何も変わらないことが、改めて身に染みた1月だった。　（山田礼二）